

リヒャルト・デーメルとニーチェ：文学史 記述の問題点

NITTA, Seigo / 新田, 誠吾

(出版者 / Publisher)

法政大学多摩論集編集委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Hosei University Tama bulletin / 法政大学多摩論集

(巻 / Volume)

32

(開始ページ / Start Page)

167

(終了ページ / End Page)

179

(発行年 / Year)

2016-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012908>

リヒャルト・デーメルとニーチェ

—文学史記述の問題点—

新 田 誠 吾

es ist einfach u n r i c h t i g, daß „kein anderer Denker und nur wenige Dichter mich so stark beeinflußt haben wie Nietzsche.“¹
「ニーチェほど強く影響を受けた思想家は他になく、作家もほとんどいない」というのは、とにかく間違いである。

I. はじめに

リヒャルト・デーメル（1863–1920）は、現在では忘れられた作家である。生前のデーメルは、間違いなくドイツ語圏を代表する詩人の一人であった。1911年、アルベルト・ゼルゲルが著した『現代詩と詩人』では、デーメルは「すぐれて奇抜で个性的であるばかりか、現代ドイツ最高の抒情詩人²」と最大級の評価をされている。雑誌『文学のこだま（Das Literarische Echo）』で、著名な文芸評論家からノーベル文学賞候補に名前を挙げられたこともあった³。しかし、今日ではシェンベルクの『浄夜（Verklärte Nacht）』をはじめ、リヒャルト・シュトラウス、ツェムリンスキー、ウェーベルン、プフィッツナー、シベリウスといった作曲家の曲の原作者として、その名を留めるのみである。

こうした事情のためか、日本の独文学研究においてもデーメルが取り上げられることは少ない。1983年に「日本におけるリヒャルト・デーメルの文献」をまとめ、日本独文学会の『ドイツ文学』に掲載した上村直己は、追記で感慨を込めてこう

¹ Richard Dehmelt: *Offener Brief an den Herausgeber der „Kultur“*. In: Richard Dehmelt (1926): *Bekenntnisse*, Berlin, S. 127.

² Albert Soergel (1911): *Dichtung und Dichter der Zeit. Eine Schilderung der deutschen Literatur der letzten Jahrzehnte*, Leipzig, S. 612.

³ Heinrich Brömse (1906): *Der Literatur-Nobelpreis*. In: *Das Literarische Echo*, 8. Jg.

述べている。「かつては現代ドイツ詩壇の大立物として多くの詩人たちに敬愛されていた彼も今は忘れられて久しい。そうなった理由はデーメル自身の詩の中に求められるとはいえ、彼はいますこし顧みられてよい詩人ではなかろうか。⁴」

さいわい日本で刊行されたドイツ文学史の書籍や文学辞典では、デーメルは忘却されておらず、ほぼすべてにデーメルに関する記述がある。その記述に共通するのが、デーメルがニーチェから影響を受けたというものである。これは、日本のドイツ文学史では、ほぼ定説と言ってよい。本稿では、この定説の検証を試みたい。まず日本の文学史の記述を確認した上で、ドイツの文学史の記述を検討する。続いてデーメル自身のニーチェ観を明らかにする。こうした考察によって、忘れられた作家に再び光を当ててみたい。

II. 文学史上のデーメル

1. 日本の文学史の記述

詩人デーメルが、日本で編纂されたドイツ文学史に初めて登場するのが、1940年に出版された鼓常良の『ドイツ文学史』である。同書はドイツ文学の通史を扱った最初の書籍であり、デーメルの項に6ページあまりを割いて詳細に解説を行なっている。

思想家としてのデーメルはニーチェと密接な関係がある。この哲人の自制克己による向上の思想には彼も同感であった。彼にとってもニーチェにとっても個性は最高のもので、自己の精神的及び感覚的天性を抑制することなく、個性を充分活かし、かくしてこそ自己を内的に解放し、自己の内に潜む動物性を超越し、高い人間性に到達するという主張は、ニーチェと一致する。それゆえ「ツァラトゥストラ」が彼に非常な感動を与えたのであった。然し彼とニーチェは全面的に一致する訳には行かなかった。それは感能人としての

⁴ 上村直己(1983):「書誌 日本におけるリヒャルト・デーメルの文献」、日本独文学会編『ドイツ文学』、71号、p.186.

彼がニーチェと一致しないのであった⁵。

鼓が1953年に新たに起稿した『ドイツ文学史』では、デーメルの項は3ページ弱に減ったが、ニーチェとの関連は記されている。

ニーチェは散文でも殊に「ツァラトゥストラ」の如き、まったくリズミカルな名文を物したから、デーメル、リルケ、ゲオルゲなどにその思想とともに文章が少なからず影響を与えた。[中略] 詩人としての彼 [=デーメル] はすべての道徳的規則や拘束を振り棄てて無制限な十分な自我拡充によってまったく現世的な形而上学に到達しようとする。ここにニーチェへの繋がりを感じさせるが、彼のニーチェ解釈は甚だ浅薄であった⁶。(カッコ内は筆者。以下同じ)

いずれの記述でも、デーメルがニーチェから影響を受けたことは認めている。ただし、デーメルのニーチェ理解が不十分であるために、ニーチェの体现者とはみなしていない。

鼓に続く1943年に刊行された秋山六郎兵衛の『独逸文学史』には、つぎのような記述がある。

デーメル (Richard Dehmel, 1863-1920) はリーリエンクローンと共に、現実主義の亜流の陳腐を形式を打破して、叙情詩に形式内容ともに新境地を開拓した一人である。[中略] 以上述べた詩人たちは、それぞれ立場は異にするが、自然主義を克服するために闘った点に於いては総て一致している。そして、その思想的原動力となったのは、言うまでもなくニーチェの哲学である⁷。

秋山は、デーメル一人に留まらず、新浪漫主義、象徴主義、表現主義のすべての作家にニーチェの影響があるとしている。相良守峯『ドイツ文学史』でも、デー

⁵ 鼓常良 (1940) : 『ドイツ文学史』、白水社、p. 606. 本稿では、旧漢字は当用漢字、旧仮名遣いは現代かな遣いに改めた。

⁶ 鼓常良 (1953) : 『ドイツ文学史』、白水社、p. 552, 596-7.

⁷ 秋山六郎兵衛 (1943) : 『独逸文学史』、三笠書房、p. 226ff.

メルとニーチェとの関係に何ら疑念を挟んでいない。「リーリエンクローンとニーチェから影響を受けた⁸⁾」デーメルは、「ニーチェ的な個人主義者であり、彼のモットーは常に『なんじであれ!』』ということであって、それは闘争によって獲得されるものであった⁹⁾」とある。相良と同様に、手塚富雄・神品芳夫の『増補 ドイツ文学案内』においても、「ニーチェの影響の様々な面のうち、さしあたり最も目立っているのは、強力な生命、強力な生き方への礼賛である¹⁰⁾」と、ニーチェからの影響を強調している。佐藤晃一『ドイツ文学史』にも、「リーリエンクローンの親友であるリヒャルト・デーメルはニーチェの影響をつよく受けた詩人で、強烈な性、英雄的精神を求め、本能と生を大胆にうたった¹¹⁾」とある。

1977年に初版が刊行され、のちに改訂された『ドイツ文学史』（東大出版会）は、20年以上にわたり、文学史のスタンダードのひとつであった。同書では、影響関係にとどまらず、さらにニーチェの思想を広めた詩人として記述している。

自然主義の意欲を汲みながら、自然主義の手法を乗越えたりヒャルト・デーメルはヴェルレーヌなどの影響を受け、リーリエンクローンとの交友を得て詩を書きはじめたが、当時の人々が希求する『新しい人間』は、新しくとらえられた「生」の原理のもとではじめて生まれてくるものであると説いて、ニーチェの思想の鼓吹者となり、時代を担う詩人となった¹²⁾。

このほかにも、上村清延『ドイツ文学史概説¹³⁾』や岡田朝雄・リンケ珠子『ドイツ文学案内¹⁴⁾』でもニーチェの影響について明確に言及している。

こうした記述は、百科事典においても同様である。『日本大百科全書（ニッポニカ）』（デジタル版）では、「デーメルの仕事は、社会的要素の強い自然主義的傾向と、個性の自我体験をニーチェ的に表現することともに始まった」とある。また

⁸⁾ 相良守峯（1969）：『ドイツ文学史』、下巻、春秋社、p. 161. ならびに第二版（1977）、p. 161.

⁹⁾ 同上、p. 162.

¹⁰⁾ 手塚富雄・神品芳夫（1993）：『ドイツ文学案内』、増補、岩波書店、p. 257.

¹¹⁾ 佐藤晃一（1972）：『ドイツ文学史』、明治書院、p. 211.

¹²⁾ 藤本淳雄・岩村行雄・神品芳夫・高辻知義・石井不二雄・吉島茂（1995）：『ドイツ文学史』、第2版、東大出版会、p. 207.

¹³⁾ 上村清延（1951）：『ドイツ文学史概説』、福村書店、p. 191.

¹⁴⁾ 岡田朝雄・リンケ珠子（2000）：『ドイツ文学案内』、増補改訂版、朝日出版社、p. 179.

『デジタル版集英社世界文学大事典』においても、デーメルは「ニーチェの強い影響を受けており、世界は自我であり、自我は世界であるといった高揚感が詩の中にみなぎっている¹⁵⁾」と書かれている。

これに対し、デーメルとニーチェの関連に言及していないのは、筆者が確認したなかでは、菊池栄一ほか『ドイツ文学史¹⁶⁾』のみである。柴田翔編著による『はじめて学ぶドイツ文学史¹⁷⁾』には、そもそもデーメルへの言及はない。

つまり、日本のドイツ文学史においては、デーメルはニーチェとの関連で説明するというのが、定説であると言える。

このようにデーメルをニーチェに結びつけて説明する傾向は、フリッツ・マルティーニ『ドイツ文学史』の記述とも符合する。同書は戦後まもない1949年に刊行され、2003年までに19の版を重ねた。この間に日本語を含む7言語に翻訳され、戦後半世紀にわたって「いわばドイツ文学史のスタンダード版¹⁸⁾」であり続けた。

マルティーニは、デーメルの項を「ニーチェの洗礼を受け、フランス象徴主義の影響を受けて以来¹⁹⁾」と書き出している。また、ニーチェの項目では「デーメルにはフリードリヒ・ニーチェの著作から発する巨大な影響力が認められる²⁰⁾」という一文から始め、ニーチェとデーメルを強固に結びつけている。デーメルの手紙の一節「私はリーリエンクローンとニーチェのあいだに根を張っている²¹⁾」を引用し、その根拠としている。

もっとも、デーメルをニーチェに結びつけたのは、マルティーニが最初ではない。そこで次節では、ドイツの文学史がデーメルをどのように記述してきたかを検討

¹⁵⁾ 『日本大百科全書（ニッポニカ）』、『デジタル版集英社世界文学大事典』のいずれも、「ジャパンナレッジ Lib (Japan Knowledge Lib)」に拠る。http://japanknowledge.com/（アクセス：2015年8月25日）

¹⁶⁾ 菊池栄一・北通文・国松孝二・野島正城・山下肇・吉田正己（1955）：『ドイツ文学史』、東京大学出版会

¹⁷⁾ 柴田翔編著（2003）：『はじめて学ぶドイツ文学史』、ミネルヴァ書房

¹⁸⁾ フリッツ・マルティーニ（高木実ほか訳）（1979）：『ドイツ文学史—原初から現代まで—』、三修社、p. 630. 日本語版の「あとがき」より。

¹⁹⁾ フリッツ・マルティーニ（高木実・尾崎盛景・棗田光行・山田広明訳）（1979）：『ドイツ文学史—原初から現代まで—』、三修社、p. 430. 原著はFritz Martini (1977) : *Deutsche Literaturgeschichte. Von den Anfängen bis zur Gegenwart*, 17. erweiterte Auflage, Stuttgart, S. 473-474.

²⁰⁾ 同上、p. 431.

²¹⁾ 同上、p. 430.

してみたい。

2. ドイツの文学史の記述

デーメルが、ドイツで出版された文学史に登場するのは、1906年のマックス・コッホが編纂した『ドイツ文学史²²』が最初である。そこでは、時系列で発表された作品名が紹介されているのみである。その3年後、デーメルの名は、著名な文学史家アドルフ・バルテルスによる『ドイツ文学史ハンドブック』の第2版（初版は1862年）に掲載される。当時デーメルは人気の詩人であり、ノーベル文学賞に推す声もあった時期とも重なる。そのため、デーメルは象徴主義の詩人として、独立の項目が立てられた²³。

1910年に出版されたオットー・フォン・ライクスナー編纂の『ドイツ文学史』は、写真や図版も多く取り入れ、詳細な解説を行った本格的なもので、2600ページを超える大著である。デーメルについては、「その詩の特異性を、民族心理学で説明しようとするばかりか、とりわけ病理学からも関心を持たれた²⁴」といった説明もあるが、写真と共にその半生や作品が数ページにわたって詳細に記されている。この時点まで、デーメルの記述にニーチェはいっさい登場しない。

1919年に改訂されたバルテルスの『ドイツ文学史』の第7,8版で、初めてニーチェへの言及がなされた。そこには、「デーメルはニーチェとポーランド出身の同性愛者スタニスラフ・プリビィシェフスキー (Stanislaw Przybyszewski) から最も大きな影響を受けた²⁵」とある。この記述は、ナチス政権下の1937年の全面改訂版でもそのまま継承された²⁶。

1912年に出版され、1926年に改訂されたアンゼルス・ザルツァーの『図版ドイツ文学史—古代から現代まで』は、デーメルへの影響関係をより詳しく記述し、リーエンクロン、プリビィシェフスキー、ヴェルレーヌ、ストリンドベルイ、ホ

²² Max Koch (1906) : *Geschichte der deutschen Literatur*, Leipzig, S. 18.

²³ Adolf Bartels (1909) : *Handbuch zur Geschichte der deutschen Literatur*, 2. Aufl., Leipzig, S. 799ff.

²⁴ Otto von Leixner (1910): *Geschichte der deutschen Literatur*, Leipzig, S. 995.

²⁵ Adolf Bartels (1919): *Geschichte der deutschen Literatur*, 7.-8. Aufl., Hamburg, Braunschweig, Berlin, S. 573.

²⁶ Adolf Bartels (1937): *Geschichte der deutschen Literatur*, 16. Aufl., Braunschweig, Berlin, Leipzig, Hamburg, S. 586.

イットマン、ニーチェの名前を挙げている²⁷。1949年に出版されることになるマルティーニの『ドイツ文学史』の記述との類似性が認められる。

もっとも、この時期に出版された文学史が、必ずしもすべてニーチェの影響を指摘したわけではない。1921年に出版されたヴィルヘルム・シェラー、オスカー・ヴァルツェルの『ドイツ文学史』には、ニーチェへの言及は見られない²⁸。ちなみに、同書の後半部分は1953年（昭和28年）、吹田順助による日本語版が刊行されている²⁹。

このように見てくると、第一次大戦を挟んで、デーメルに対する文学史上の記述が大きく変化したことがわかる。生を肯定し、性に対してもタブー視することなく作品にしたデーメルが、ニーチェとの類似性を感じさせたことは、容易に想像がつく。

ここでは、そうした風潮を表すものとして、1913年に出版された伝記『リヒャルト・デーメル』を挙げておきたい。著者のエミール・ルートヴィヒ（Emil Ludwig 1881-1948）は、20世紀初頭に伝記作家として人気を博した。ルートヴィヒは、デーメルにニーチェを対置させて評論を行なった。つまり、同書が広く読まれたとすれば、デーメルとニーチェを強固に連関させる役割を果たした可能性がある。この伝記のなかで、ラテン語も交えてこう書いた。「哲学者としてニーチェは作家デーメルに勝するというなら、作家としてデーメルは哲学者ニーチェに勝る。50年後も、『哲学者ならニーチェ、作家ならデーメル（Nietzsche philosophus, Dehmel poeta.）』と言われるだろう³⁰」

Ⅲ. デーメルのニーチェ観

この章では、デーメル自身のニーチェ観について考察する。1890年から突然始

²⁷ Anselm Salzer (1926): *Illustrierte Geschichte der deutschen Literatur: von den ältesten Zeiten bis zur Gegenwart*, 2. Aufl., München, S. 1688.

²⁸ Wilhelm Scherer u. Oskar Walzel (1921): *Geschichte der deutschen Literatur*, Berlin, S. 658ff.

²⁹ オスカー・ワルツェル（吹田順助鑑修・原健忠訳）（1953）：『近代ドイツ文学史』、創元社、p. 176ff.

³⁰ Emil Ludwig (1913): *Richard Dehmel*, Berlin, S. 41.

まったニーチェ・ブームのなか、デーメルはどのようにニーチェを理解していたのだろうか。また、それは詩人デーメルとどのような関連があったのだろうか。

多くの文学史で、デーメルをニーチェに結びつける際の根拠となっているのが、デーメルの手紙にあるつぎの2つの文である。

私はニーチェとリーリエンクローン（シラーとゲーテ、ヴァーグナーとベックリン）の間に根ざしています³¹。（1903年にユリウス・バーブに宛てた手紙）

ニーチェとリーリエンクローンがいなければ、デーメルとモンベルトが世に出ることがあったでしょうか？³²（1909年にハンス・ブランデンブルクに宛てた手紙）

こうした表現だけを見ると、たしかにニーチェの影響を感じさせる。しかし、これは、デーメルの独特な表現であることを理解する必要がある。そこには、彼自身の作家としての自己理解が隠されているからである。

デーメルは、自己の多面性をはっきり自覚していた。多様であるからこそ、二つの極となる芸術家を置き、その間に位置づけることで、自己を理解しようとしていた。1902年に書いた「Die Kultur 編集長に対する公開書簡」につぎのような一節がある。

少なくとも私は、神秘主義者と同程度に合理主義者です。それは、神智学だけでなく、哲学的にも語るためです。現実主義者で、理想主義者。心理学では、感覚論者で、スピリチュアリスト（心霊者）。生理学では (physiologisch)、経験論者で、形而上学者でもある。芸術では、自然主義であり、象徴主義でもある。根本的に、この対比にどれも違いはありません³³。

さらに補足したいのであれば、私は、経験主義者のリーリエンクローンと、

³¹ Richard Dehmel (1923): *Ausgewählte Briefe aus den Jahren 1902 bis 1920*, Berlin, S. 10.

³² Ibid., S. 178.

³³ Richard Dehmel (1926), S. 124. physiologisch は、phylosophisch（哲学では）の誤りか？

純粹に形而上学的なモンベルトの中間に位置づけられるかもしれません³⁴。

さらにデーメルは、この二つの極を一つにすることを詩人の使命と考えていた。つぎの例は、そのことを端的に示している。

この二人 [= シラーとゲーテ] への関係は、こう表現できるかもしれません。私は、感情面ではシラーに似た傾向があり、思考はゲーテに似た厳格さがある。別の表現をすれば、詩人ではシラーに、芸術家ではゲーテに近い。[中略] 実際、二人は「たゆまず努力し、我慢強く」国民の精神を代弁しました。国民が分裂した時代にそうしたのです。ならば、現代の詩人は二人の詩作を一つにしなければなりません。ニーチェは、あまりにシラーが言うところの感傷的過ぎて、この意義に達していません³⁵。(1902年にハンス・ベンツマンに宛てた手紙)

つぎに、デーメルのニーチェ理解を考察してみよう。デーメルとニーチェの類似性を初めて公に指摘したのは、雑誌 *Die Kultur* の編集長をしていたザシャ・ジムヒョヴィッツ (Sascha Simchowitz) である。ジムヒョヴィッツは、1865年(1868年とも)に生まれ、ベルリンで教育を受け、医師、ドラマトゥルク、作家、劇評家として活躍した。1902年、ケルンで *Die Kultur* の編集長をしていた際に、デーメルとニーチェの関連について講演を行なった。デーメルは、編集長ジムヒョヴィッツの求めに応じて長文の反論「*Die Kultur* 編集長に対する公開書簡」を書いた。それは、同年8月に雑誌に掲載された。

ジムヒョヴィッツは、デーメルをロマン派の精神の継承者と評した。これに対し、デーメルは真っ向から反論する。

「ノヴァーリスとフリードリヒ・シュレーゲル」でさえ、その雄弁さには敬意を払うが、あの延々と続く空想ごっこは、そもそも我慢ならない。その精神

³⁴ Ibid., S. 127.

³⁵ Dehmel (1923), S. 5-6.

を受け継ぐのは私ではなく、ニーチェであり、しかも彼らを凌ぐ³⁶。

これに続く箇所、デーメルは自身のニーチェ体験を説明している。ここで重要なのは、デーメル自身がニーチェからの影響を明確に否定している点である。

「ニーチェほど強く影響を受けた思想家は他になく、作家もほとんどいない」というのは、とにかく間違いである。自己の信念を最も正直に告白したニーチェに敬意を払って、私もニーチェに対する考えをすべて告白しよう。崇拜とは十代の女子がすることだ。かつて（若いときに書いた『救済（Erlösungen）』を印刷に回す直前に）一週間ほどニーチェに夢中になったことがある。ツァラトゥストラが奏でる大いなる闘争心に我を忘れてのめり込んだ。しかし、すぐに完全に醒めてしまい、闘争心は空振りに終わった。[中略] まるで夢を見ているときにベッドから床に落ちるような衝撃に匹敵するもので、醒めた頭で、聖書とロマン派ふうの語り口でニーチェへの「弔辞」を書き、その本に収録した³⁷。

デーメルが『救済』の出版以前に『ツァラトゥストラ』を読んだというのは、ユリウス・バープ（1880-1955）の書いたデーメルの伝記の記述とも一致する。バープは、生前のデーメルと親交があり、デーメルの伝記を2度書いた。伝記によれば、デーメルは1890年に『ツァラトゥストラ』を読んだ³⁸。バープは、先に挙げた「私はニーチェとリーリエンクローンの間に根ざしています」という手紙を受け取った当人である。にもかかわらず、デーメルの死後、1926年に出版した伝記のなかでも、ニーチェの影響については触れていない。これは、当時のドイツ文学史の記述とは大きく異なる点である。

デーメルが書いた「弔辞」とは、「フリードリヒ・ニーチェへ（An Friedrich Nietzsche）」と題する詩で、『救済』に収録された。ニーチェの文体を模したいわばパロディで、山を下ってきたツァラトゥストラに、若者が「何をなすべきか」

³⁶ Dehmel (1926), S. 127-8.

³⁷ Ibid..

³⁸ Julius Bab (1926): *Richard Dehmel*, Leipzig, S. 60ff.

と問いかけると、ツァラトゥストラは「私についてきなさい」と答える。若者はついていくが、彼のもとを去る。この詩は、デーメルのニーチェへの訣別を宣言したものである。

デーメルは、批評家ニーチェの功績については、一定の評価をしていた。ニーチェの「勇敢な理想は、一人一人の強い精神に自分の価値を認める原動力になる³⁹⁾」と考え、その価値を認めていた。しかしながら、その思想に共感することはなかった。デーメルにとって、「超人」や「貴族道徳」という概念は理解を超えるもので、受け入れがたいものだった。

古から今まで世界を変革しようとした人が切実に願ってきたのに、なぜ人類は超人の国を作ったことがなく、これからも作ることはないのでしょうか？

それは、超人など作る必要がないからです。[中略] ニーチェより人類を導くことに長けていた例えばナザレのイエスのような人は、ユートピアじみた超人などいっさい説かなかった。生まれつき奴隷の者は英雄にはなれないが、奴隷も人間だから、してはいけないことを周りの人から学ぶ。戒律を守れば人のためになる、つまり成長して世の中に出ていけるし、神にも近づける、永遠も手に入れられることを知っていたのです⁴⁰⁾。

さらにデーメルは、作家ニーチェの文体も嫌っていた。若い詩人へのアドバイスを求められ、こう返答している。

よく若い詩人にこうアドバイスします。現代詩の技術レベルには目を向けなさいと。シュテファン・ゲオルゲだけを手本にせよと言ったことはありません。[中略] 常に挙げるのが、ホルツ、モンベルト、ダウテンダイ、ホーフマンスタールです。もちろんリーリエンクロンと私も。ただニーチェの韻律だけは薦めたことはありません。ニーチェは、素人だと熱を帯びたレトリックに魅せられるところがありますから⁴¹⁾。

³⁹⁾ Richard Dehmel (1922): *Ausgewählte Briefe aus den Jahren 1883 bis 1902*, Berlin, S. 426.

⁴⁰⁾ Ibid., S. 428.

⁴¹⁾ Dehmel (1923), S. 61.

思想的にも文学的にも、生前のデーメルはニーチェにほとんど共感しなかった。それでは、なぜ自分を「リーリエンクロンとニーチェの間に」根ざすと表現したのだろうか。それはデーメルが二人を詩や思想の改革者として捉えていたと私は考える。ほかにデーメルが挙げたシラー、ゲーテ、ヴァーグナー、ベックリーンは、文学、音楽、絵画における革新者である。つまり、思想界のニーチェのような革新的な芸術家になりたいというデーメルの願望が表出されたものと考えられる。

ニーチェの死後、ニーチェの妹エリーザベトから詩の朗読の依頼を受けたさいには、困惑して、親友のリーリエンクロンに相談の手紙を出している。そこには、評価とともに、ニーチェに対する本音がうかがえる。

君に内緒で質問がある。ある意味良心の問題。フェルスター＝N [ietzsche] 夫人からニーチェの誕生日会（10月25日）に出席して、ニーチェの詩とツァラトゥストラの一部を朗読してほしいと頼まれた。自分（世間の評価じゃなく、性格）を「傷つける」ことなく、そんなことができると思う？ [中略] ニーチェは天才的な批評家だと思っている。本当の意味でね。ソクラテス以来続いてきた人類の叡智の蓄積を裁いた。ところが、その「評価」すべき産物が予言めいた（だからおよそ詩ではない）規範で、それで福音史家に対抗しようというのだから、僕には道德の教義と一緒に無意味だ。[中略] しかし、思ったり言うことと矛盾する行動をとるんだったら、そういう自分は許せない。ことニーチェに対しては、どちらにもいい顔はしたくないんだ⁴²。

IV. 文学史記述の問題

これまでの考察で、ドイツでは第1次大戦後の文学史から、デーメルとニーチェを結びつける記述が登場したことがわかった。その記述は、日本で刊行されたドイツ文学史にも脈々と受け継がれてきた。

⁴² Ibid., S. 55-6.

しかし、デーメルの書き遺したものを見ると、ニーチェ体験はあったものの、ニーチェに対する共感や理解はまったくと言っていいほど、読み取れない。それでも、自身をリーリエンクローンやニーチェのあいだに位置づけたなかに、詩作の革新を目指した可能性を見て取れる。デーメル自身の言葉を借りるまでもなく、デーメルをニーチェの強い影響下にあったとする記述は、きわめて疑わしいと言わざるをえない。

文学史も歴史の記述であるから、事実認定だけでなく、現在の視点からの評価が根底にあるはずである。しかし、デーメルの記述を通してみると、別の基準も見えてくる。日本におけるドイツ文学史記述では、本国、すなわちドイツの文学史を参照するという文化的伝統があったということである。文学史が評価の体系を記述するものであれば、日本で刊行されるドイツ文学史は、日本の研究成果を盛り込むことは、ある意味当然のことと考える。

デーメルがドイツ語圏で名前を知られるようになったきっかけに、1896年に出版された詩集『女と世界 (Weib und Welt)』に対する裁判と検閲がある⁴³。現在日本の大学図書館に、同詩集の所蔵はない。1896年当時、デーメルは無名の詩人であった。デーメルの全集が日本に入ってきたのは、1906年以降のことである⁴⁴。ドイツで有名になった作家の書籍は輸入される対象になった。ドイツの文学史で大きく取り上げられたデーメルは、日本のドイツ文学史でも大きく取り上げられた。その後、デーメルは忘れられてしまったが、日本ではニーチェとデーメルとの関係は、検証されることもなく、そのまま受け継がれてきたのである。

⁴³ 拙著 (2014): 「リヒャルト・デーメルの『浄められた夜』—1900年前後の創作と検閲—」, 法政大学『多摩論集』、30巻、p. 43-58. を参照されたい。

⁴⁴ 1906年の全集は、東京帝国大学、京都帝国大学、大阪帝国大学ほかに所蔵がある。